

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	女性の摂食障害および「体重や体型へのこだわり」に関する個人差の多面的検討
Sub Title	
Author	前川, 浩子(Maekawa, Hiroko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.279- 293
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000068-0279

とするなら、自尊感情に直接働きかけるのではなく、他者からの肯定的な評価をいかに直接的に伝えるかなどの教育的な工夫も必要であろう。人が適応的に生きるために自尊感情を適応にどう結び付けていくか、特に自尊感情が高くない場合にどのような教育的な支援が可能であるかを検討する必要があると考えられる。

これらの業績の一部は、すでに行動遺伝学の学会や国際的なテキストにも引用されており、その学術的貢献は特筆に値する。また短期的とはいえ、2時点の縦断研究として双生児法を自尊感情に用いた研究は国際的にも例が少なく、その価値も大きい。

しかしながらいくつかの不十分な点が散見される。まず自尊感情を取り巻く「自己」に関する研究に関するレビューが必ずしも十分でなく、本研究の自己研究における位置づけや意義が必ずしも明確でないこと、行動遺伝学の統計手法が単変量遺伝分析とコレスキー分解による多変量遺伝分析という初歩的な手法のみに止まり、取り上げられた関連要因も損害回避と家族の適応性というごく限られた側面であるため、自尊感情の変化、とりわけ教育的な関わりが反映されるであろう変化に関わる要因の特定やメカニズムの理解に十分には及んでいないことなど、幅広い視野から探求する姿勢が不十分だという点が問題として指摘できる。

それでもなお、本研究が自己研究に対する最も基本的な行動遺伝学的知見を世界に先駆けて着実に発表し続けたというこの研究領域における先駆性は十分に評価されるべきものであり、著者に博士（教育学）の学位を授与するに値するものと判断する。

博士（教育学）[平成21年2月24日]

甲 第3082号 前川 浩子

女性の摂食障害および「体重や体型へのこだわり」 に関する個人差の多面的検討

[論文審査担当者]

主 査 慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
博士（教育学）

安藤 寿康

副 査 慶應義塾大学教職課程センター教授・大学院社会学研究科委員
博士（心理学）

伊藤美奈子

副 査 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
文学博士

菅原ますみ

内容の要旨

【問題と目的】

摂食障害は体重の増加を強く恐れ、自己の身体の形や大きさの認知に重大な障害を呈すことによって、体重調整や食行動に異常をきたすことを特徴とする精神疾患である。また、女性は男性の約10倍の有病率を持つことから、女性の精神的健康を考える上では重要な精神疾患であると考えられている。

米国精神医学会編集による「精神疾患の診断・統計マニュアル (DSM-IV-TR)」(American Psychiatric Association, 2000)によると、摂食障害の発生率は世界的に最近数十年で増加傾向にあると言われているが、わが国でも、厚生労働省が行った「平成14年 患者調査」(厚生労働省, 2005)によると、入院および外来を含めた医療機関を受診している摂食障害を持つ人の数は、2002年では4000人を超え、増加の傾向にあることがわかり、深刻な問題としてとらえられるようになってきた。

摂食障害が問題になるのは、まず身体的な危険を伴うからである。低体重が進むとそれは生命の危機につながる。極端な低体重ではない場合でも、体重が急速に減少していくと、やはり生命の危険は高まる。過食嘔吐がある人の場合にも、嘔吐や下剤の乱用により、血液中のナトリウムやカリウムなどのバランスが崩れるため、心臓に負担がかかり、突然死の危険が増すとも言われている。また、過食嘔吐することには社会生活に支障をきたすという問題もはらんでいる。一日の時間のうちの多くが過食や嘔吐に費やされ、食費の支出も膨大になり、社会生活を正常に送ることが難しくなってしまう。摂食障害というと、「やせたいという気持ちで、ダイエットをしすぎる女性のわがままな病気」と考えられてしまうことがあるようだが、以上のような理由から、摂食障害は精神疾患でありながら、生命の危険をはらむ重篤な疾患と言えるのである。

また、近年、女性の間では肥満度の指標であるBody Mass Index (BMI=体重(kg)÷身長²(m))の値により、「やせ」と分類される女性の割合が20年前に比べて20代では2倍に増加し、青年期の女性は年々やせの傾向にあることが報告された(厚生労働省, 2003)。同調査では10代、20代の女性において実際には全体として「やせ」の者が増加しているのに対し、意識では自分の体型を「太っている」と評価する者が増加し、現実の体型が「普通」であるにも関わらず、「太っている」と自己評価する者が10代の女性では70.9%、20代の女性では66.7%にもものぼり、加えて、10代の女性では低体重であってもそのうち41.0%が体重を減らそうと試みているということが明らかになった。厚生労働省では平成12年より国民の健康を守る上で「健康日本21」(21世紀における国民健康づくり運動)を推進し、食生活や生活習慣の見直しを提唱しているにも関わらず、このような最近の国民栄養調査の結果から、青年期の女性は実際に「やせ」の傾向にあると同時に、意識の面でも「やせ志向」が高まっているということが明らかになっている。適正体重を維持できないということは、身体に悪影響を及ぼす可能性があることはもちろんのこと、体重を減らそうとするあまり、危険な薬品や食品摂取で重篤な健康被害(死亡・肝障害など)が発生する恐れや、あまりにも強い体重や体型へのこだわりから食行動に異常をきたす場合には、先述したような摂食障害につながる危険性もある。これまで食行動に関しては生活習慣病の観点から「肥満」が問題にされることが多かったが、「やせ」の問題に関しても同様に扱う必要があると考えられる。

そこで、本論文ではわが国における女性の摂食障害および、摂食障害の危険因子でもあり、女性の「やせ志向」の背景にあると考えられる「体重や体型へのこだわり」を研究の対象とすることにし、摂食障害や、「体重や体型へのこだわり」に関する個人差を多面的に検討することを目的とした。摂食障害を持つ女性の特徴を把握し、また、一般女性が有する「体重や体型へのこだわり」に影響を及ぼす要因をさまざまな角度から検討することで、摂食障害の発達に歯止めをかける手がかりが得られる可能性が広がると考えた。

これまでの先行研究により、摂食障害や女性が持つ体重や体型へのこだわりには①親の養育行動、②メディア、同年代の仲間の影響、太っていると指摘された経験、家族のやせ志向といった社会的要因、

さらに③パーソナリティが表現型レベルでの関連が示され、さらに行動遺伝学的研究から体重や体型へのこだわりには、④ある程度の遺伝的寄与が認められることが明らかにされている。従って、表現型レベルの関連の背後には遺伝と環境の構造がそれぞれ存在していることが示唆されている。しかし、わが国では①、②、③、④それぞれに関して十分な実証研究が存在しない。そこで本研究ではわが国の女性の体重や体型へのこだわりにはどのような要因が関連し、そしてそれらが遺伝や環境のレベルでどのような構造を持っているのかということ明らかにすることを目的とし、次のテーマに沿って10の研究による検討を行った。

1. 「どのような要因が女性の体重や体型へのこだわりに影響を与えているのか」

研究1: 女性の体重や体型へのこだわりに影響を及ぼす要因の検討

2. 「女性の体重や体型へのこだわりは、すべて環境で説明されるのか」

研究2: 女性の体重や体型へのこだわりに関する遺伝と環境の構造

研究3: 双生児モデルの一般児への適用

研究4: 「体型」と体重や体型へのこだわりの関係

3. 「表現型の上で女性の体重や体型へのこだわりと関連する要因は遺伝により媒介されるのか、それとも環境により媒介されるのか」

研究5: 女性の体重や体型へのこだわりと関連諸要因との関係における遺伝と環境の構造——「パーソナリティ」、「メディアの影響」、「家族のやせ志向」、「友人のやせ志向」を要因として

4. 「女性の体重や体型へのこだわりの個人差を生み出す非共有環境は何か」

研究6: 女性の体重や体型へのこだわりに影響を及ぼす非共有環境要因の探索の試み——卵性双生児のきょうだい経験の違いからの検討——

5. 「不健康な食行動と摂食障害の関係」

研究7: 摂食障害の女性から見た家族や家庭機能に関する研究——きょうだいとの比較を中心として

6. 「摂食障害（神経性無食欲症）を持つ女性の特徴に関する検討——家族、家庭機能とパーソナリティに注目して——」

研究7: 摂食障害の女性から見た家族や家庭機能に関する研究——きょうだいとの比較を中心として

研究8: 神経性無食欲症を持つ女性のパーソナリティ特徴と体重や体型へのこだわりに関する検討

研究9: 高い体型不満を持つ神経性無食欲症の女性および一般女性のパーソナリティ特性に関する検討

7. 「パーソナリティが社会的要因と出会うとき」

研究10: パーソナリティ特徴と社会的要因の関係

【結果および考察】

1. どのような要因が女性の体重や体型へのこだわりに影響を与えているのか（研究1）

研究1では、「やせ願望」と「体型不満」によって表現され、それ自体が摂食障害の危険因子になる(e. g. Leon et al., 1993)と考えられている体重や体型へのこだわりにどのような要因が影響を及ぼしているのかを、18歳から31歳までの青年期女子を対象に構造方程式モデリングを用いて検討を行った。

体重や体型へのこだわりに影響を及ぼすと考えられる要因に関してはこれまでの先行研究から、(a) 親の養育行動、(b) 「体型に関する指摘を受けた経験」、(c) 「やせに対する価値観」、(d) 「メディアの影響」、(e) 「家族のやせ志向」、(f) 「友人のやせ志向」を取り上げることとした。

これらの (a) ~ (f) までの要因に関しては、それぞれが体重や体型へのこだわりと関連していることが示されてきているが、それでは、一体どの要因が大きな説明力を持つのであろうか。本研究ではこれら全ての変数を同時にモデルに組み込み、諸要因間の因果モデルを構築し、検討を行うことを目的として行われた。

その結果、社会的要因に含まれる変数のほうが親の養育行動よりも「体重や体型へのこだわり」と強い関連性を示すということが明らかになった。まず、「やせ願望」にも「体型不満」にも「やせに対する価値観」が関連していた。青年期女子には他者から肯定的な評価を引き出そうとする「賞賛獲得欲求」が働き、この「賞賛獲得欲求」が、“やせれば今よりいいことがある”という「メリット感」を媒介として「やせ願望」を促進していることがすでに示されているが(馬場他, 2000)、本研究ではそれだけではなく、このような価値観の背景には、「体型に関する指摘を受けた経験」があることが示された。つまり、他者から自分の体型について太っていると指摘されたり、やせるように言われたりした経験が、やせているほうが良い、やせているほうが人として魅力があるという価値観と関連し、体型への不満感や、やせたいという気持ちを加速させている可能性があることが考えられる。さらに、体型への指摘は「やせに対する価値観」だけでなく、「体型不満」にも直接影響を与えており、自分の体型について太っていると言われたり、やせたほうが良いと言われたりすることは、「体型不満」を高めることにつながっていた。

さらにテレビや雑誌でのダイエット特集への敏感さや、紹介されたダイエット方法を試すという「メディアの影響」が「やせ願望」にも「体型不満」にも影響を与えていた。この部分はこれまでの先行研究でも示されており、同じ結果が得られたと言える。また、「友人のやせ志向」と「やせ願望」との関連性が見られ、年代の仲間が持っている体重や体型への関心から本人が影響され、自らのダイエット行動を発達させるという先行研究の結果が支持された。同年代から受ける影響は思春期以降特に大きくなる。本研究で対象としたサンプルよりも、より若い年代を対象にして検討することも大切であり、学校教育の中で予防的なアプローチを考えることも重要になるであろう。

以上のことから、体重や体型へのこだわりに直接影響を与えていたのは、「体型に関する指摘を受けた経験」、「やせに対する価値観」を持っていること、「メディアの影響」、そして「友人のやせ志向」であることが明らかになった。しかしながら、「やせ願望」と「体型不満」の誤差間の相関は.52と有意であり、研究1で取り上げた要因だけでは説明されない共通性があることが示唆され、体重や体型へのこだわりに影響を与える要因が他にも存在することが同時に示された。

2. 女性の体重や体型へのこだわりは、すべて環境で説明されるのか(研究2・3・4)

研究1によって、「体型に関して指摘を受けた経験」、「やせに対する価値観」、「メディアの影響」、「友人のやせ志向」といった社会的要因が体重や体型へのこだわりと表現型の上で関連しあっていたことが示されたが、これらの要因は「環境」として体重や体型へのこだわりに影響を及ぼしていたのであろうか。

そこで、研究2では体重や体型へのこだわりを表現する「やせ願望」や「体型不満」それ自体が持つ、遺伝と環境の構造を明らかにするために単変量遺伝分析が行われた。15歳から30歳までの女性の

一卵性双生児と二卵性双生児を対象として、「やせ願望」および「体型不満」に関して単変量遺伝分析を行ったところ、どちらに関しても遺伝と非共有環境によって説明されるAEモデルが最適となり、欧米での先行研究と一致した。

「やせ願望」では、遺伝の寄与率が42%、非共有環境の寄与率が58%であり、「体型不満」では、遺伝の寄与率は59%、非共有環境の寄与率は41%であり、「やせ願望」の遺伝率よりも高くなっていることが示された。

また、研究3では、双生児から得られた知見を一般児に適用できるのかどうかの確認が行われた。まず双生児と一般児の「やせ願望」と「体型不満」に関してそれぞれ確認的因子分析を行い、双生児と一般児との間に表現型の構造に違いがないことが確認された。さらに、双生児のデータから得られた相加的遺伝、共有環境、非共有環境から、「やせ願望」および「体型不満」それぞれへの推定値を一般児のモデルに固定して遺伝因子分析を行ったところ、「やせ願望」および「体型不満」に関して、双生児のデータを一般児にあてはめることに無理がないことが示された。なお、得られたモデルに関しては、双生児データのみの場合（研究2）と同様に、「やせ願望」、「体型不満」のどちらにも共有環境は認められず、遺伝と非共有環境による構造を持つことが明らかになった。

研究2および研究3から、体重や体型へのこだわりには、まず、共有環境からの寄与率が認められないということが共通していた。例えば、家庭の中に、いつもやせることを話題にする家族がいたり、家族一緒にダイエットを特集した番組を見たりすることはあり得ることであろう。しかし、そのような環境があったとしても、この環境によってきょうだいの「やせ願望」や「体型不満」は類似するわけではないのかもしれない。むしろ、環境要因として「やせ願望」や「体型不満」に影響を与えているものは、きょうだいが別々に経験する、非共有的なものであることが示された。

それでは、遺伝の影響とは何を意味するのであろうか。1つには、体重や体型の影響が考えられる。双生児研究によって、体重の個人差は遺伝要因によって大部分が説明されることが明らかになっており、個人の体重の約70%を遺伝によって説明できることが示されている（Grio et al, 1991）。この遺伝的にかなり規定された体重の要因、あるいは、それを反映した体型を有することが、われわれの「やせ願望」や「体型不満」に遺伝的に関わっている可能性があると考えられたため、研究4では実際の体型の指標であるBMIと体重や体型へのこだわりに関して2変量の遺伝分析が行われた。その結果、高い遺伝率を持つ体型そのものが、体重や体型へのこだわりと表現型の上で相関があり、その相関を作り出しているのは共通の遺伝要因によるものであることが示された。われわれは、遺伝的に規定された自分の体型を認知し、その認知された体型を変えたいのか、それとも変えなくていいのかということの判断を自ら行っているのではないかと考えられる。もし、ある体型を持つことによって経験しやすい環境によって、体重や体型へのこだわりが影響されていたとするならば、BMIの背後に仮定された非共有環境要因から、「やせ願望」や「体型不満」へパスが向かわなくてはいけないが、本研究では非共有環境要因の媒介は見られなかった。

3. 表現型の上で女性の体重や体型へのこだわりと関連する要因は遺伝により媒介されるのか、それとも環境により媒介されるのか（研究5）

研究1～4で得られた結果をもとに、体重や体型へのこだわりと表現型において関係が見られる要因との間にある遺伝と環境の構造が検討された。まず、「やせ願望」と表現型上で有意な相関が見られた「家族のやせ志向」および「友人のやせ志向」を含めた多変量遺伝分析を行ったところ、「やせ願望」

に独自に影響を与えている遺伝要因はなく、「家族のやせ志向」および「友人のやせ志向」の背後にあるそれぞれの遺伝要因が影響を与えていたことが示された。特に興味深いのは、「家族のやせ志向」と「やせ願望」との間に共通する非共有環境要因はなく、共通の遺伝要因によって媒介されていたという点であり、「家族のやせ志向」と自分の「やせ願望」との間に見られる関係性は環境による結びつきではなく、家族のメンバーが遺伝的に類似した体型を持つといったことなどが重なるの要因であるのかもしれない。ところが、「友人のやせ志向」と「やせ願望」との関係は共通の遺伝要因と共通の非共有環境要因とで媒介されており、「友人のやせ志向」によって「やせ願望」が影響されるということは、環境的であると考えられた。

「体型不満」は報酬依存、協調、および「メディアの影響」と表現型の上で相関が見られ、多変量遺伝分析の結果、まず、「メディアの影響」と「体型不満」の間は共通の遺伝要因および、共通の非共有環境要因によって媒介されていた。また、報酬依存および協調と「体型不満」もそれぞれ共通の遺伝要因によって媒介されており、パーソナリティ部分と「体型不満」との関連は、環境の影響を受けていないことが示された。このことから、研究2、3で示された「体型不満」における遺伝要因の一部はパーソナリティによって説明することが可能であると言えよう。さらに、報酬依存および協調と「メディアの影響」との間もそれぞれ共通の遺伝要因によって媒介されていることが示された。つまり、ダイエットに関する番組を見たり、雑誌を読んだりすることの背後には、遺伝的にパーソナリティが関わっており、このようにメディアから受けた影響が「体型不満」につながるという現象は、環境によってだけでなく、遺伝によっても結び付けられている構造を持つことが明らかになった。

4. 女性の体重や体型へのこだわりの個人差を生み出す非共有環境は何か（研究6）

研究6では一卵性双生児のみを対象として、同じ遺伝子型を有する一卵性双生児の表現型上の差異に注目して、その差異を作り出す非共有環境要因の同定を行った。

一卵性双生児のペアのうち、きょうだいの片方が「やせ願望」あるいは「体型不満」の得点が高く、もう一方のきょうだいが「やせ願望」および「体型不満」の得点の両方が低い、体重や体型へのこだわりが不一致であるペアを分析対象とした。前者はこだわりあり群、後者はこだわりなし群に割り振られた。

一卵性双生児の体重や体型へのこだわりの差異に関係する要因は、きょうだいの実際の体型を反映するBMI、およびDaniels et al. (1985)の「差異経験に関するきょうだい調査票 (SIDE)」の項目が用いられ、対応のあるt検定が行われた。まず、BMIを従属変数とした場合には、こだわりなし群よりもこだわりあり群のBMIの平均値が有意に高く、実際に体型に違いがあることが示された。「きょうだいの体型に違いがある (似ていない)」という事実が二人の間に非共有環境となって働き、体重や体型へのこだわりの差異を生み出すことが明らかになった。

SIDEの82項目に関しては、5%水準で有意になった項目は見られなかった。しかし、10%水準では、こだわりあり群のほうが、「きょうだいに対して自信を持った態度でいる」、「きょうだいに対して勝とうとする」のは自分よりも相手のほうが多かったと答える傾向があった。つまり、きょうだいとの関係性において、自分よりも相手のほうがどちらかと言えば強い立場にあったと認知しているということである。このようなきょうだいとの関係性は自分への自信のなさに関係し、体重や体型へのこだわりを高める要因になるのかもしれない。

さらに、親の養育の領域では、こだわりあり群のほうが、「他の家族の失敗を母親に責められた」の

は自分のほうである、と認知する傾向が高かった。自分のせいではないのに、自分が責めを負うことが多いということは大きなストレスになる可能性がある。このようなストレスもまた、体重や体型へのこだわりを高める要因となり得るのかもしれない。以上のことから、体重や体型へのこだわりの非共有環境要因は、実際のきょうだい間の体型の差によるものであることが示された。そして、きょうだいに対して強い態度を持ってないことや、他の家族の失敗を母親に責められることが多かったということなども、弱い要因となり得る可能性が示唆された。

5. 不健康な食行動と摂食障害の関係（研究7）

研究7では、神経性無食欲症（AN）を持つ女性の最初に食行動が変化した時期について調べられた。①拒食またはダイエット、②過食、③嘔吐、④下剤使用、⑤利尿剤使用といった、不健康な食行動がいつから始まったのかについて検討が行われた。最も低年齢で開始されていたのは①拒食またはダイエットで、17歳ぐらいの年齢で開始が見られた。次いで早くから見られたのは④下剤使用で、平均18歳台での開始となっていた。また、①～⑤のいずれかが開始された最も早い時期をINDEX年齢としたが、このINDEX年齢の平均値は17.57歳であり、ANそのものの発症年齢（診断がなされたときの年齢）の平均値が20.44歳であったことから、青年期中期で最初の不健康な食行動の変化が見られ、その後青年期後期から成人期前期に診断がなされるまでに発達する可能性が示唆された。このことから、青年期中期は神経性無食欲症（AN）の発症の予備軍を生み出す時期であり、この時期に不健康な食行動があらわれているかどうかを見きわめることができれば、早期介入の余地がある可能性があることが示唆された。

6. 摂食障害（神経性無食欲症）を持つ女性の特徴に関する検討

——家族、家庭機能とパーソナリティに注目して——（研究7・8・9）

研究7～9では、神経性無食欲症（AN）を持つ女性と、ANを持たない女性とを比較することで、AN女性が持つ特徴に関して検討が行われた。研究7においても、摂食障害に影響を与えている非共有環境要因に関して、研究6で使用されたSIDE（Daniels et al., 1985）により、AN女性と対照群の女性の比較を行った。研究7において、AN女性と対照群の女性との間に有意差が見られた項目は研究6と異なっていただけでなく、きょうだい関係、親子関係、所属する友達グループの特徴、所属するグループが興味を持つ特徴、およびライフイベントのあらかじめ設定されていた全ての領域で有意差が見られた項目があった。きょうだい関係では、相手のきょうだいに対して優しい態度でいる一方で、相手に対して嫉妬しがちであるという傾向があり、親子関係では、親は自分よりも相手のきょうだいに対して優しくたとらえる傾向があった。所属していたグループもあまり活動的とは言えず、ライフイベントでは、家族の心理的な問題に影響を受けている傾向が示された。

AN女性は、きょうだいには優しくし、よい関係を築きたいと思いつつも、相手に嫉妬してしまうというアンビバレントな感情を抱き、親子関係においても、親からの自分の扱われ方をネガティブにとらえている傾向があった。さらに、友人グループにおいてもあまり活動的とは言えない。研究1では、親の養育行動から体重や体型へのこだわりには直接的な影響は認められなかった。つまり、摂食障害ではない女性が有する体重や体型へのこだわりには親の養育行動は影響を与えない。しかし、AN女性を対象にすると、きょうだいや親との関係性を低く認知し、友人関係も活発とは言えないことから、親の養育行動だけでなく、対人関係のパターンが、体重や体型へのこだわりというよりは、神経性無食欲症という問題そのものに関わってくる可能性が示唆された。

研究7および8では、Temperament and Character Inventory (TCI) (Cloninger et al., 1993) を用いて、AN女性のパーソナリティ特徴を把握した。先行研究によって示された (e. g. Bulik et al., 1995; Fassino et al., 2002; Klump et al., 2000) ように、研究7では、AN女性は対照群の女性と比べて、低い新奇性追求、高い損害回避、低い報酬依存、低い自己志向、および低い協調を示すという結果が得られた。また、AN女性と対照群の女性の体重や体型へのこだわりを比較したところ、「やせ願望」ではAN女性の得点が有意に高かったが、「体型不満」に関しては両群に有意差が見られなかった。

これまで「体型不満」は、摂食障害の中核的な症状とされてきたが、ANを持たない女性であっても、AN女性と同程度の「体型不満」を持つことが示された。同じくらい高い「体型不満」を持っているにも関わらず、ANである女性とそうではない女性にはどのようなパーソナリティの違いがあるのだろうか。このことを検討するために研究8が行われた。研究8では、AN／「体型不満」高群と対照／「体型不満」高群の2群に分けて、TCIの各次元に関してt検定を行ったところ、AN／「体型不満」高群は損害回避が高く、自己志向が低いことが示された。高い「体型不満」を有し、同時に、高い損害回避と低い自己志向というパーソナリティ特性を持っていることが、神経性無食欲症の危険を高める可能性があることが示唆された。

7. パーソナリティが社会的要因と出会うとき (研究10)

研究10では、先行研究で一貫して摂食障害を持つ女性の特徴をとらえた、損害回避、自己志向、および協調の3次元の組み合わせによってパーソナリティ特徴を規定し、このようなパーソナリティ特徴が「メディアの影響」、体型に関して指摘された経験、および「友人のやせ志向」といった社会的要因とどのように関係しあって、体重や体型へのこだわりに影響を及ぼすのかを検討した。「やせ願望」を従属変数とした場合、パーソナリティ特徴×「メディアの影響」の交互作用が有意になり、高い損害回避+低い自己志向+低い協調のパーソナリティ特徴を持つ者は、「メディアの影響」を受けた場合には、「やせ願望」の得点が低く、逆に「メディアの影響」をあまり受けないときには「やせ願望」の得点が高いという傾向が見られた。社会との関わりという点で、協調に注目して考察すると、この第3クラスター群は協調が低いという特性を持つため、メディアを通して、ダイエットの情報にさらされたとしても、世の中の流行に流されにくく、流行に乗りたくないという気持ちが働くという可能性がある。そのため、「やせ願望」得点が低いということが考えられる。逆に、「メディアの影響」をあまり受けていない場合は、自己志向が低いという特性、すなわち、自分への受容の低さや、自信のなさが、やせたいという気持ちにつながるということが考えられる。

「体型不満」を従属変数とした場合には、パーソナリティ特徴×「友人のやせ志向」の交互作用が有意になり、高い損害回避+低い自己志向+低い協調のパーソナリティ特徴を持つ者は、周りの友人にやせようとする意識があまりいない場合には、自分の「体型不満」得点は低い、やせようとする意識のある友人が周りに多い場合には、自分の「体型不満」も高かった。先の「やせ願望」におけるパーソナリティ特徴×「メディアの影響」の考察と同様に、社会との関わりという点で、協調というパーソナリティ特性に注目すると、協調が高い場合には、周りの他者にうまく合わせて行動しようとすると考えられ、そのため、周りの友人のやせようとする様子に影響されて、自分の体型はどうであろうかと省みる機会を得て、そして自分の体型に抱く不満が高くなるということが示唆される。

これまで、摂食障害とパーソナリティとの関連については、多くの研究から高い損害回避、低い自己志向、および低い協調が摂食障害を持つ女性の特徴であるということが示されてきた。本研究でも、こ

のようなパーソナリティ特徴を持つことが、「やせ願望」、および「体型不満」の高さに関連があることが示され、やはり、高い損害回避と低い自己志向、および低い協調は摂食障害や、その中核的な症状である「やせ願望」、および「体型不満」と関連があるといえる。しかしながら、本研究では、このようなパーソナリティ特性と対極にある、低い損害回避、高い自己志向、および高い協調を併せ持ったパーソナリティ特徴が「友人のやせ志向」との交互作用によって、「体型不満」を高めることが明らかになった。

確かに、これまでの臨床サンプルでの研究結果から、高損害回避、低自己志向、および低協調は、摂食障害を持つ女性のパーソナリティ特徴の典型であるといえる。しかし、本研究の結果から、損害回避が低く、自己志向、および協調が高い場合にも、「友人のやせ志向」という社会的要因との組み合わせによって「体型不満」に影響を与えるということが示されたことは、これまで明らかになっている典型的なパーソナリティ特徴以外にも、個人が持つ摂食障害の危険因子の存在の可能性を示唆するものであるといえる。特定のパーソナリティ特性のみに注目するのではなく、パーソナリティ特性のどのような組み合わせが、どのような環境要因と交互作用を起こすのかということも研究することによって、これまで見逃されてきた摂食障害の危険因子が同定される可能性があり、予防、介入、そして治療により多くの知見を与えることができると考えられる。

【意見】

本論文と「教育」との接点

健康教育のための基礎的資料の提供

本論文と「教育」との関係には2つの意味合いがある。1つは、われわれが精神的に健やかな生活を送るためにはどのようにしたらよいのか、という方法を教育の枠組みの中で提案するために必要な基礎的資料の作成である。われわれにとって、社会に適応して生きていくためには、知識を身につけること、技能を身につけること、社会性を身につけること、なりたい理想の自分を見つけること、自分自身のことを理解すること、世界を理解することなど、さまざまなものが必要である。

このような、適応のために必要なものを獲得していく場の1つに教育が考えられる。身体的に健康であることが重要であるということとわれわれは経験的に知っているが、精神的に健康であるということがなぜ必要なのであろうか。精神的健康は生き生きと自分らしく生きるための重要な条件であり、自分の感情に気づいて表現できること（情緒的健康）、状況に応じて適切に考え、現実的な問題解決ができること（知的健康）、他人や社会と建設的でよい関係を築けること（社会的健康）を意味している。人生の目的や意義を見出し、主体的に人生を選択すること（人間的健康）も大切な要素であり、精神的健康は「生活の質」に大きく影響するものであると考えられる。教育を通して、身体的健康のみならず、精神的健康の維持や向上のための知識や情報を得ることができ、もし、不適応状態に陥った場合には解決策が得られるようなシステムを構築するために必要な基礎的な知見を提供することが本論文の位置づけであった。

近年、マスメディアを通じた精神的健康に対する知識の啓発、地域でのセミナー等の開催といった社会全体をあげての健康教育が活発になりつつある。学校においても、児童・生徒の精神的健康の状態、とりわけうつ病を把握することに対して敏感となり、どのような処遇の仕方が適切か、ということが検討され始めている。このような動きがうつ病だけではなく、他の精神症状や不適応状態についても同様

に広がっていけば教育を通した国民全体の精神的健康の向上が目指されるであろう。

教育的視点から見た精神的健康

本論文と「教育」との関係の1つめの意味合いとして、われわれが精神的に健やかな生活を送るためにはどのようにしたらよいか、という方法を教育の枠組みの中で提案するための基礎的資料の作成が必要であると述べた。この資料の作成には、まず、精神的な健康を崩したときに陥る不適応状態や、その不適応状態と関連する要因について、できるだけさまざまな方向から検討することが必要であると考えた。

親の養育が子どもの人格形成や、発達に影響を及ぼすという考えはFreud, Bowlby, Ainsworthらの研究にその歴史をさかのぼることができる。彼らが歴史に残した研究は、今もなお、「人生早期に親から受けた養育経験が、精神症状の発症に関係している」という考えとして根強く残っている。しかしながら、このような伝統的な考え方によって傷つけられた人が多いのも事実である。1950年代、統合失調症は乳児期の親の養育の悪さが引き起こすものだと固く信じられ、この根拠のない迷信に多くの親が責められ続けた。今では、統合失調症は遺伝的な要因によって疾患が引き起こされているということは多くの人が知るところとなっているが、それでもなお、親の養育の失敗だという見方が全くなくなったわけではない。ただ1つの原因だけで、ある問題を説明するということは不可能に近い。しかしながら、われわれは、できるだけ原因を簡単にとらえ、すぐに解決策を求めるあまり、限られた原因だけから問題をながめようとしてしまう傾向がある。

教育心理学者のCronbach (Cronbach, 1963) は、個人の行動、パーソナリティ、学力などを、すぐに教育的価値尺度をあてはめて判断するのではなく、どのような条件の下で、どのような形成作用が働いてそれらが形づくられるのか、という見方を教育に取り入れた。彼が取り入れた見方は、Aptitude Treatment Interaction (適性処遇交互作用) として教育心理学に大きな影響を与えたといえる。並木(1997) は、教育界で提唱されてきた教授方法の大部分は主効果的な議論で終わっているものが多く、平均的には良い結果の得られる教授方法であっても、もし、その背後に適性と教授方法の交互作用が潜んでいるならば、その教授方法の犠牲者の存在が疑われると述べている。さらに、それだけでなく、ATIは弱者への優しさと心くばりを忘れない教育的観点にほかならない、とも述べている。

本論文と教育との関係の2つめの意味合いは、Cronbachが教育に取り入れた交互作用的なものの見方で、精神的健康をとらえ直すということである。子どもの問題や、精神疾患に関しては、その原因を真っ先に親の養育や家庭環境の問題へ帰結しがちな風潮があり、このような問題を生じさせないための万能薬的な環境があるはずだという思いを抱きがちである。しかしながら、このようなものの見方のために、傷つけられている人が存在している可能性や、ほかの原因を見落としてしまっている可能性がある。このような問題をできるだけ解決するために、本論文では精神疾患や不適応に関して、多面的にとらえ、可能な範囲で交互作用的に検討することによって、知見を得ることを目指してきた。

精神疾患や不適応を正しく理解するには、たった1つの「環境」要因がその発症をもたらしているという狭い見方をするのではなく、その「環境」要因と思われているものが実は個人(子ども)から引き出されて作り出されているものであるということ、そして、環境自体を作り出している(選択している)のも個人である、という見方をしていくことが必要であると考えられる。個がおかれた状況や取り巻く環境のみから現象を説明することから脱却し、現象を作り出しているのは個でもあり、その個と環境との交互作用に目を向けていくという見方へ転換させていくことが、精神疾患にまつわる偏見を少しでも

緩和させる一助になるのではないかと考えられる。そして、この偏見を緩和させるという作業を現実的なものにするものこそ、教育が持つ力であると考えられる。

論文審査要旨

本論文は、女性に多く見られ今日の問題となっている摂食障害および「体重や体型へのこだわり」（「やせ願望」や「体型不満」）に関する個人差に関わる要因を解明するため、双生児を含む一般女性、および神経性無食欲症（Anorexia Nervosa: AN）を持つ女性を対象に、個人内の要因（体型・パーソナリティ）、家族の要因（親の養育行動・きょうだい関係）、社会的要因（「メディアの影響」・「体型に関する指摘を受けた経験」・「友人のやせ志向」）、さらに双生児法を用いて遺伝要因の影響力も含めての多面的な因果モデルを構築した。

論文の構成は以下の通りである。

第Ⅰ部 序論 女性の摂食障害および「体重や体型へのこだわり」について研究することの意義

1. 摂食障害とは
2. 本論文における目標
 - 2.1. 女性の摂食障害と女性の摂食障害と「体重や体型へのこだわり」の関係
 - 2.2. 摂食障害および体重や体型へのこだわりと関連する要因
 - 2.3. 親の養育行動の要因
 - 2.4. 社会的要因
 - 2.5. パーソナリティの要因
 - 2.6. 人間行動遺伝学的アプローチ
3. 双生児研究法の基礎
4. 摂食障害に関する双生児研究
5. 本論文の目的と方向性
6. 研究の流れ

第Ⅱ部 研究

- 研究1 女性の体重や体型へのこだわりに影響を及ぼす要因の検討
- 研究2 女性の体重や体型へのこだわりに関する遺伝と環境の構造
- 研究3 双生児モデルの一般児への適用
- 研究4 「体型」と女性の体重や体型へのこだわりの関係
- 研究5 女性の体重や体型へのこだわりと関連諸要因との関係における遺伝と環境の構造—「パーソナリティ」、「メディアの影響」、「家族のやせ志向」、「友人のやせ志向」を要因として—
- 研究6 女性の体重や体型へのこだわりに影響を及ぼす非共有環境要因の探索の試み—一卵性双生児のきょうだい経験の違いからの検討—
- 研究7 摂食障害の女性から見た家族や家庭機能に関する研究—きょうだいとの比較を中心として—
- 研究8 神経性無食欲症を持つ女性のパーソナリティ特性と体重や体型へのこだわりに関する検討

研究9 高い体型不満を持つ神経性無食欲症の女性および一般女性のパーソナリティ特性に関する検討

研究10 パーソナリティ特徴と社会的要因の関係

第III部 総合考察

1. どのような要因が女性の体重や体型へのこだわりに影響を与えているのか (研究1)
2. 女性の体重や体型へのこだわりは、すべて環境で説明されるのか (研究2・3・4)
3. 表現型の上で女性の体重や体型へのこだわりと関連する要因は遺伝により媒介されるのか、それとも環境により媒介されるのか (研究5)
4. 女性の体重や体型へのこだわりの個人差を生み出す非共有環境は何か (研究6)
5. 不健康な食行動と摂食障害の関係 (研究7)
6. 摂食障害 (神経性無食欲症) を持つ女性の特徴に関する検討— 一 家族、家庭機能とパーソナリティに注目して— (研究7・8・9)
7. パーソナリティが社会的要因と出会うとき (研究10)
8. 総括

第IV部 意見

本論文は、第I部「序論」、第II部「研究」、第III部「総合考察」、第IV部「意見」からなる。

第I部では、女性に多く見られる「摂食障害」および、摂食障害の中核となる「体重や体型へのこだわり」に関する個人差に関わる要因を多面的に検討することを主な目的に据え、問題の社会的、学術的背景と、方法論、とくに双生児法による人間行動遺伝学のアプローチの概要が説明される。

摂食障害は体重や体型に対する態度や認知の乱れによって体重調整や食行動に異常をきたすことを特徴とする精神疾患であるだけでなく、栄養失調や過食・嘔吐による心臓への負担などから、生命の危険をはらむ重篤な疾患であり、摂食障害を持つ人の数は世界的に増加している。わが国では厚生労働省が「食を通じた子どもの健全育成 (食育)」の取り組みにおいて、教育の場において健康に関する必要な情報や知識を獲得し、自分自身の健康を大切にできるような人間を形成できるような環境づくりの必要を唱えている。にもかかわらず、特にわが国における女性の「体重や体型へのこだわり」を促進し、高めるような要因についての検討はまだ十分とは言えない。こうした「体重や体型へのこだわり」の個人差要因には、親の養育行動、社会的要因のような環境要因やパーソナリティだけでなく、遺伝要因も影響していることも双生児研究から示唆されている。このことから、遺伝要因を検出できる双生児法の必要性が論じられ、その概要が説明される。こうした背景と方法論をもとに第II部では10の研究がなされる。

まず、研究1より、一般女性の「体重や体型へのこだわり」の個人差を説明する上で大きな影響力を持っていたのは、「メディアの影響」、「体型に関する指摘」、「やせに対する価値観」および「友人のやせ志向」であることが明らかにされ、これまで欧米で行われた先行研究と同様の傾向が認められた。養育行動からの影響はほとんど認められなかったが、唯一「父親による過干渉傾向」は抑制変数となっており、「体型に関する指摘を受けた経験」や、「家族のやせ志向」の程度が同じ場合には、「父親による過干渉傾向」を強く受けたほうが「体重や体型へのこだわり」の低さを予測することが明らかにされた。子どものプライバシーを侵害したり、子どもを自分の言いなりにコントロールしようとしたりする

過干渉な養育行動は、これまであまり望ましくないとされてきた。しかしながら、子どもが社会的な場面ネガティブな経験をしたり、リスクを負うような場面にさらされたりする場合には、このような過干渉的な父親の養育行動は不適応な結果を中和させるような働きを持つ防御因子になり得る可能性が示唆された。

研究2, 3, 4では、主に双生児のデータを用いることにより「体重や体型へのこだわり」の個人差に寄与する遺伝と環境の寄与率の推定が行われた。まず研究2において、単変量遺伝分析を用いて、やせ願望で42%、体型不満で59%、そしてBMIで73%の遺伝の寄与率を推定した。環境要因には家庭環境は関与せず、もっぱら個人に特有の非共有環境要因であった。研究3では、研究2の双生児データで得られた表現型構造の推定値が一般児にも適用可能であることを、両者を統合した確認的因子分析によるモデル比較によって確認した。研究4ではBMI、やせ願望、体型不満の間に多変量遺伝分析により、これら3変量の間を媒介しているのが共通の遺伝的要因であることを明らかにした。

研究5においても双生児データを分析することにより、「体重や体型へのこだわり」と、パーソナリティおよび社会的要因の変数間の相関について、行動遺伝学的観点から検討が行われた。その結果、表現型上での「体重や体型へのこだわり」とパーソナリティ間の相関が遺伝によって作られているのに対し、社会的要因との相関は遺伝と非共有環境の両方から作られていることが示された。このことから、「体重や体型へのこだわり」の個人差は遺伝的なパーソナリティと、さらにそのパーソナリティから影響を受けた社会的要因が非共有環境を通して作り出されるものであることが示唆された。

研究6では一卵性双生児のきょうだい経験の違いを検出するSIDE (Sibling Inventory Differential Experience, Daniels & Plomin, 1985) の日本語翻案を作成し、体重・体型へのこだわりとの関連を調べた。その結果、「きょうだいに対してより自信がない」「相手に勝とうとする傾向がない」「他の家族の失敗を母親に責められた」という認知を持つ方が体重・体型へのこだわりが大きいことが示された。

それでは、神経性無食欲症 (AN) を持つ女性は親の養育をどのようにとらえているのであろうか。研究7ではANである女性の家族や家庭機能に関して、きょうだいとの比較によって検討が行われた。ANである女性は「母親は自分よりも相手のきょうだいの好きなことに興味を示した」、「父親は自分よりも相手のきょうだいと一緒に何かをすることを楽しんでいた」、「自分のほうがきょうだいよりも、父親から他の家族がしたことを責められた」ととらえる傾向が見られ、親との関係をよりネガティブに認知する傾向が示された。研究1では、親の養育が一般女性の「体重や体型へのこだわり」にはあまり影響を与えていなかったのに対し、研究7では親の養育行動をネガティブにとらえることが摂食障害であることの個人差を説明することが示唆された。

研究8では、神経性無食欲症 (AN) の女性と対照群の女性のパーソナリティの比較が行われた。AN女性は、高い損害回避、低い自己志向、そして低い協調を示す傾向があることが示され、これは多くの先行研究から示されていることであり、やはりこの3つの特性はAN女性の典型であると考えられた。研究9では高い体型不満をもつAN女性と、同じように高い体型不満を持つ一般女性のパーソナリティ特性の比較を行い、AN/体型不満高群が高い損害回避と低い自己志向性を示すことが示された。研究10では、高い損害回避、低い自己志向、そして低い協調の3つの特性によって一般女性のパーソナリティを分類し、そこで得られたパーソナリティ特徴と社会的要因を独立変数に、体型不満を従属変数にしたところ、低い損害回避、高い自己志向、および高い協調をあわせ持つ、パーソナリティ特徴を持っている者が、周りにやせようとする友人が多い場合に、体型不満が高まるということが示された。この

ことから、今まで典型であると考えられていたパーソナリティ特徴とは逆のパーソナリティ特徴を持っていても、どのような社会的要因に出会うかによって、体型不満が高まる場合があるということが明らかにされた。

第Ⅲ部では第Ⅱ部の各研究の結論が要約・概観され、これらをふまえて第Ⅳ部において、教育に対する意見が次のようにまとめられる。子どもの問題や、精神疾患に関しては、その原因を真っ先に親の養育や家庭環境の問題へ帰結しがちな風潮があり、このような問題を生じさせないための万能薬的な環境があるはずだという思いが抱かれがちである。しかしながら、まず教育のシステムを提案する上での前提となる基礎的資料を作成することが必要であるということ、そしてこのような問題の解決を目指して、本論文では精神疾患や不適応に関して多面的にとらえ、可能な範囲で諸要因を検討することによって知見を得ることが必要であるということである。本論文で行われた、摂食障害や「体重や体型へのこだわり」をさまざまな観点から、そして変数同士の組み合わせも考慮して検討することにより、今まで見過ごされてきた要因であっても、摂食障害や「体重や体型へのこだわり」に影響を与える可能性があることが示された。このことは新たな危険因子や防御因子を明らかにしたと同時に、摂食障害にまつわる誤解や偏見の解消に向けての情報として、健康教育の場面や臨床心理学の領域に寄与するものであるとする。

最後に本論文での限界について述べる。本論文では、女性の摂食障害や「体重や体型へのこだわり」に関して多面的な方向から検討を行ったが、摂食障害、および「体型や体型へのこだわり」への発達がどのような仕組みで起こるのかという明確な因果関係については示すことができなかった。本研究でのデータはすべて単一時点で得られたものであり、本研究で得られた知見に基づいて、「体重や体型へのこだわり」がどのような発達をたどったときに、摂食障害となってしまうのかということに関しては、縦断的研究から得られたデータをもとにした因果モデルを構築する必要であると結ぶ。

本論文は大規模な一般人口サンプルに加え、双生児サンプル、摂食障害サンプルを対象として、先行研究で抽出されてきたリスク因子を多面的に盛り込んだ調査研究を丹念に重ね、その結果、摂食障害の主症状である「体型不満」と「やせ願望」に関連して、メディアの効果、家庭外の対人関係の影響、両親の養育態度の相対的貢献度、パーソナリティ特徴との関連など、興味深い知見が得られている。摂食障害群と一般群の比較からは、両者の共通点と相違点を抽出することに成功しており、とくに体型不満に関して両者に有意な相違がみられなかったことは、現在の若年女性に蔓延する身体像の歪みが危険域にまで達している可能性を示唆するかもしれない知見であり、健康教育上重要な知見を提出している。さらに双生児サンプルを用いた行動遺伝学的検討から、環境リスク要因についてよりクリアな結論を得ることに成功している。また体型不満と友人のやせ志向との間に交互作用が認められるという結果は、学校現場での「問題」を考える時にも有益な情報を提供し、一般の思春期の子どもたちを考える際にも、興味深い結果である。心理臨床研究としても、本研究のようなデータで実証していくことには大きな意味があり、これらの点から摂食障害の予防に関する貴重な基礎資料が得られていると高く評価できる。

しかしながらいくつかの問題点も指摘しなければならない。まず「体重と体型へのこだわり」を測定する尺度が欧米圏で用いられてものをそのまま用いているが、それが日本人の意識を測定する測定具として最適な内容かどうか、再検討が必要である。

分析法として、ここで取り上げた複数の要因を統括的に分析する多変量遺伝解析のモデルが今日的に

はかなり一般化しているが、それが十分に使いこなせておらず、比較的初歩的な解析法にのみ頼って結果を羅列的に記述しているのは残念である。

結果の解釈については、一般群にも共通してみられる「体型不満」「やせ願望」と摂食障害患者の症状とを直線的に考え、安易に直結させるのではなく、両者を区別する要因についても明らかにできると、臨床的により意味のあるデータとなったであろう。また親の養育態度が関連なかったという結果について、摂食障害の場合、養育態度が原因の場合もあれば、症状ゆえに親子関係がこじれている場合もありうる。こうした側面をもう少し分析方法を工夫してアプローチして欲しかった。

さらに欲をいえば、著者自らも一部指摘しているが、使用概念とモデルの洗練化（eg. 遺伝的つながりのある家族要因と家族外要因の区分け、「社会的」環境の定義の正確化、発症に至るプロセスモデルの探索）、発症に関する原因論の掘り下げ、縦断的検討の必要性、少数例であっても摂食障害を発症している双生児サンプルによる検討の必要性、男性に関する検討の必要性など、このテーマが本来射程に入れるべき問題空間を広く見通しながら本論文の位置づけを明確にしておく必要があったと思われる。

また「教育」との関連を、摂食障害に関連する諸要因に関する「基礎資料の提供」と位置づけることだけで「教育学」と呼ぶに本当に値するののかという疑問も発せられた。教育学的研究とは、教育に「応用する」知識を提供するのではなく、直接教育そのものを問う学でなければならないのではないのか。

このような問題点は、しかしながら本論文の本質的価値を脅かすものというよりも、本論文の一連の成果が次に向かうべき方向性を示すものということができる。本論文で取り上げられた研究の多くは、他の研究者との共同研究の中でなされたものではあるが、その中で著者は実質的で中心的な役割を演じており、共同研究から離れた後も、その成果を国際学会で発表する努力を独力で続けてきた。こうしたことがらを鑑み、本論文は著者に博士（教育学）の学位を授与するに値するものと判断する。